

学校向けヤングケアラー実態調査結果 (全体版)

令和5年10月



学校向けヤングケアラー実態調査の結果（全体版）

◆ 調査目的

ヤングケアラーに関する学校の状況やニーズ等を把握し、支援を必要としているヤングケアラーの早期発見や適切な支援につなげる方策を検討する。

◆ 実施時期 令和5年8月10日～9月19日

◆ 調査方法 WEB

◆ 調査対象 下表のとおり

	対象校数 (A)	回答数 (B)	【参考】 B/A
公立小学校	311	303	97.4%
公立中学校 (中等教育学校・義務教育学校後期課程含む)	168	158	94.0%
公立高等学校 (全日制・定時制)	65	52	80.0%
合計	544	513	94.3%

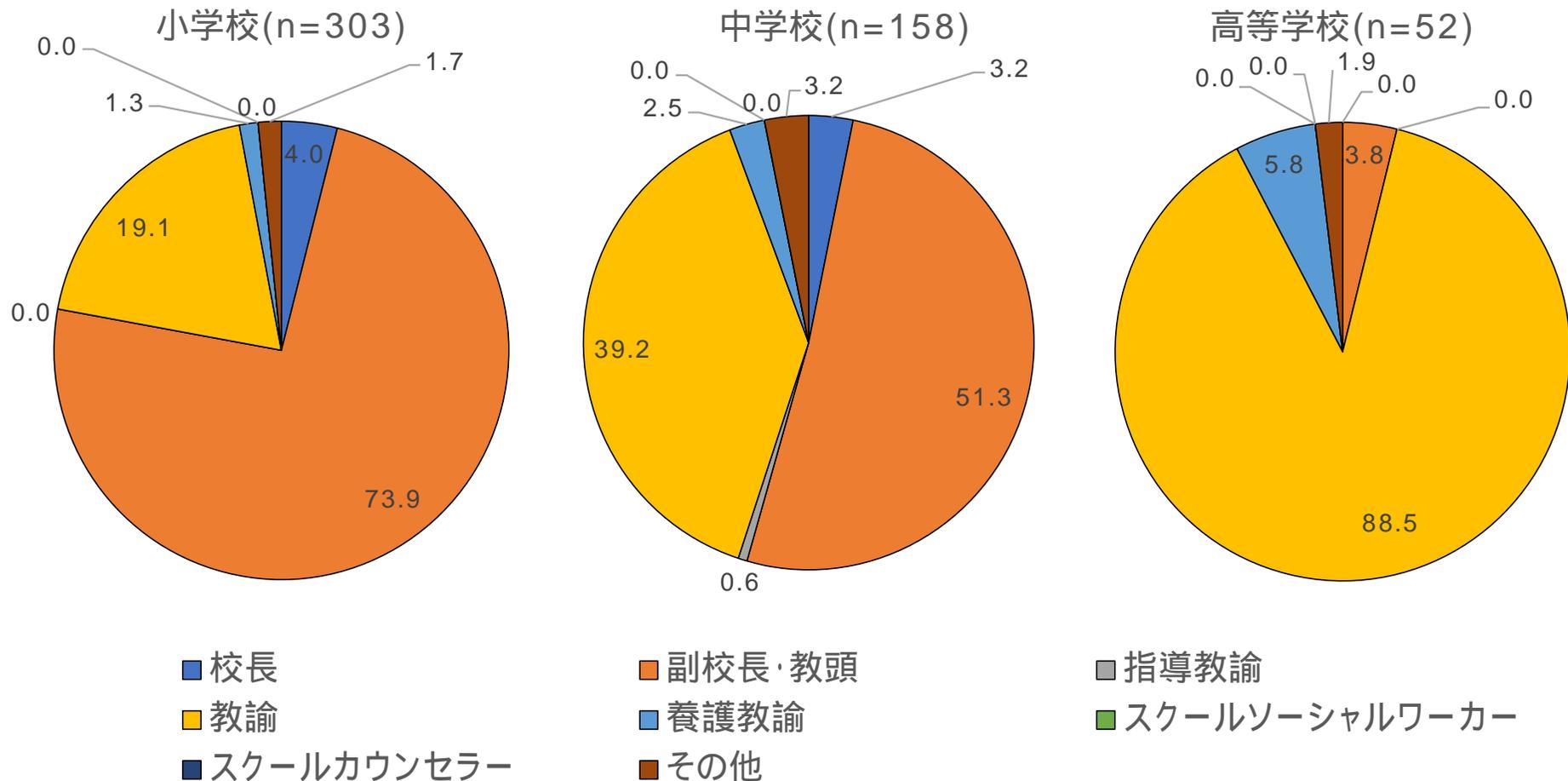
同一校からの複数回答の可能性があるため、参考として記載

学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

回答者の役職

回答者については、小学校、中学校においては副校長・教頭が最も多く、高校では教諭が最も多くなっている。

回答者の役職(%)



学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

学校の所在地

回答があった学校の所在地の分布については、下表のとおりとなっている。

学校の所在地

	小学校 (n=303)	中学校 (n=158)	高等学校 (n=52)		小学校 (n=303)	中学校 (n=158)	高等学校 (n=52)
長崎市	68(22.4%)	26(16.5%)	11(21.2%)	雲仙市	16(5.3%)	7(4.4%)	1(1.9%)
佐世保市	45(14.9%)	27(17.1%)	9(17.3%)	南島原市	13(4.3%)	7(4.4%)	2(3.8%)
島原市	7(2.3%)	4(2.5%)	4(7.7%)	長与町	5(1.7%)	3(1.9%)	1(1.9%)
諫早市	56(18.5%)	38(24.1%)	4(7.7%)	時津町	2(0.7%)	2(1.3%)	0(0.0%)
大村市	15(5.0%)	6(3.8%)	3(5.8%)	東彼杵町	2(0.7%)	1(0.6%)	0(0.0%)
平戸市	14(4.6%)	7(4.4%)	3(5.8%)	川棚町	2(0.7%)	1(0.6%)	1(1.9%)
松浦市	7(2.3%)	7(4.4%)	1(1.9%)	波佐見町	3(1.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
対馬市	12(4.0%)	8(5.1%)	3(5.8%)	小値賀町	2(0.7%)	1(0.6%)	1(1.9%)
壱岐市	11(3.6%)	3(1.9%)	1(1.9%)	佐々町	1(0.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)
五島市	0(0.0%)	0(0.0%)	4(7.7%)	新上五島町	13(4.3%)	4(2.5%)	1(1.9%)
西海市	9(3.0%)	5(3.2%)	2(3.8%)	無回答	0(0.0%)	1(0.6%)	0(0.0%)

学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

ヤングケアラーの認知度

ヤングケアラーという言葉を知っていると回答した割合は全学校種でほぼ100%であり、学校として意識して対応しているとの回答も8割を超えている。

ヤングケアラーの概念の認識

(%)

	調査数(コ)	言葉を知らない	言葉は聞いたことがあるが、具体的には知らない	言葉は知っているが学校としては特別な対応をしていない	言葉を知っており、学校として意識して対応している
小学校	303	0.0	1.0	18.8	80.2
中学校	158	0.0	3.8	15.8	80.4
高等学校	52	0.0	0.0	11.5	88.5

学校向けヤングケアラー実態調査の結果 (全体版)

ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握の状況

で「ヤングケアラーという言葉を知っており、学校として意識している」と回答した学校に対し、実態把握の状況を尋ねたところ、小・中・高の順に「把握している」の割合が高くなっている。「把握している」と回答した学校では、何らかのツールを用いて実態把握をしているという回答も一定数あった。

- 1 ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握の有無 (%)

	調査数 (n)	把握している	「ヤングケアラー」とと思われる子どもはいるが、その実態は把握していない	該当する子どもはいない(これまでいなかった)
小学校	240	19.6	5.8	74.6
中学校	126	36.5	8.7	54.8
高等学校	46	65.2	8.7	26.1



- 2 ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握の方法 (複数回答) (%)

	調査数 (n)	アセスメントシートやチェックリストなどのツールを用いている	特定のツールはないが、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って検討・対応している	その他
小学校	49	28.6	61.2	74.6
中学校	46	34.8	41.3	54.8
高等学校	30	43.3	40.0	26.1

学校向けヤングケアラー実態調査の結果 (全体版)

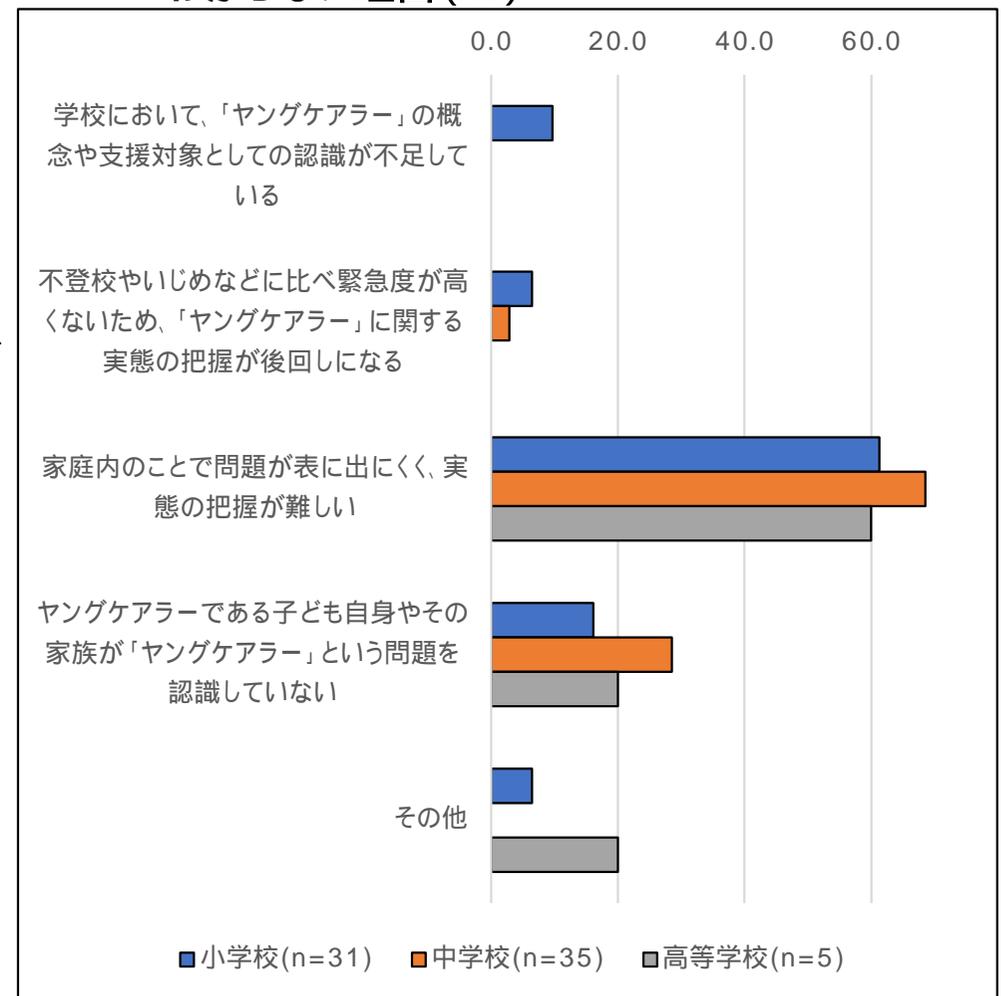
ヤングケアラーと思われる子どもの有無

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した割合は小学校、中学校、高校の順に高くなっている。また、「わからない」と回答した学校に理由を尋ねたところ、「家庭内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」との回答が多かった。

- 1 ヤングケアラーと思われる子どもの有無 (%)

	調査数 (n)	いる	いない	わからない
小学校	303	8.6	83.5	7.9
中学校	158	19.6	63.9	16.5
高等学校	52	44.2	48.1	7.7

- 2 ヤングケアラーと思われる子どもがいるかわからない理由 (%)



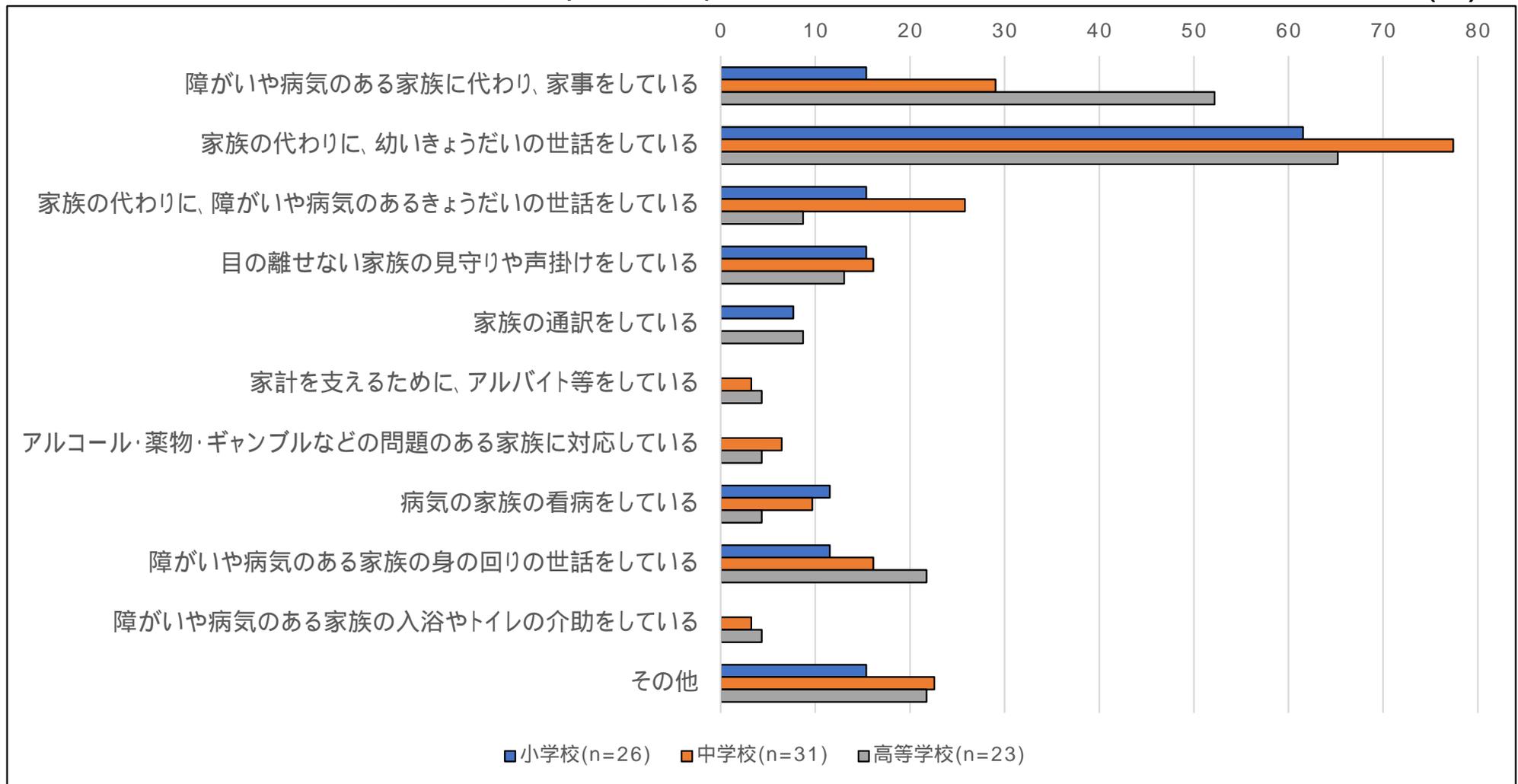
学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

ヤングケアラーと思われる子どもの状況

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した学校での子どもの状況としては、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が最も高い。また、高校では「障がいや病気のある家族に代わり、家事をしている」が小学校・中学校と比較して高くなっている。

ヤングケアラーと思われる子どもの状況(複数回答)

(%)



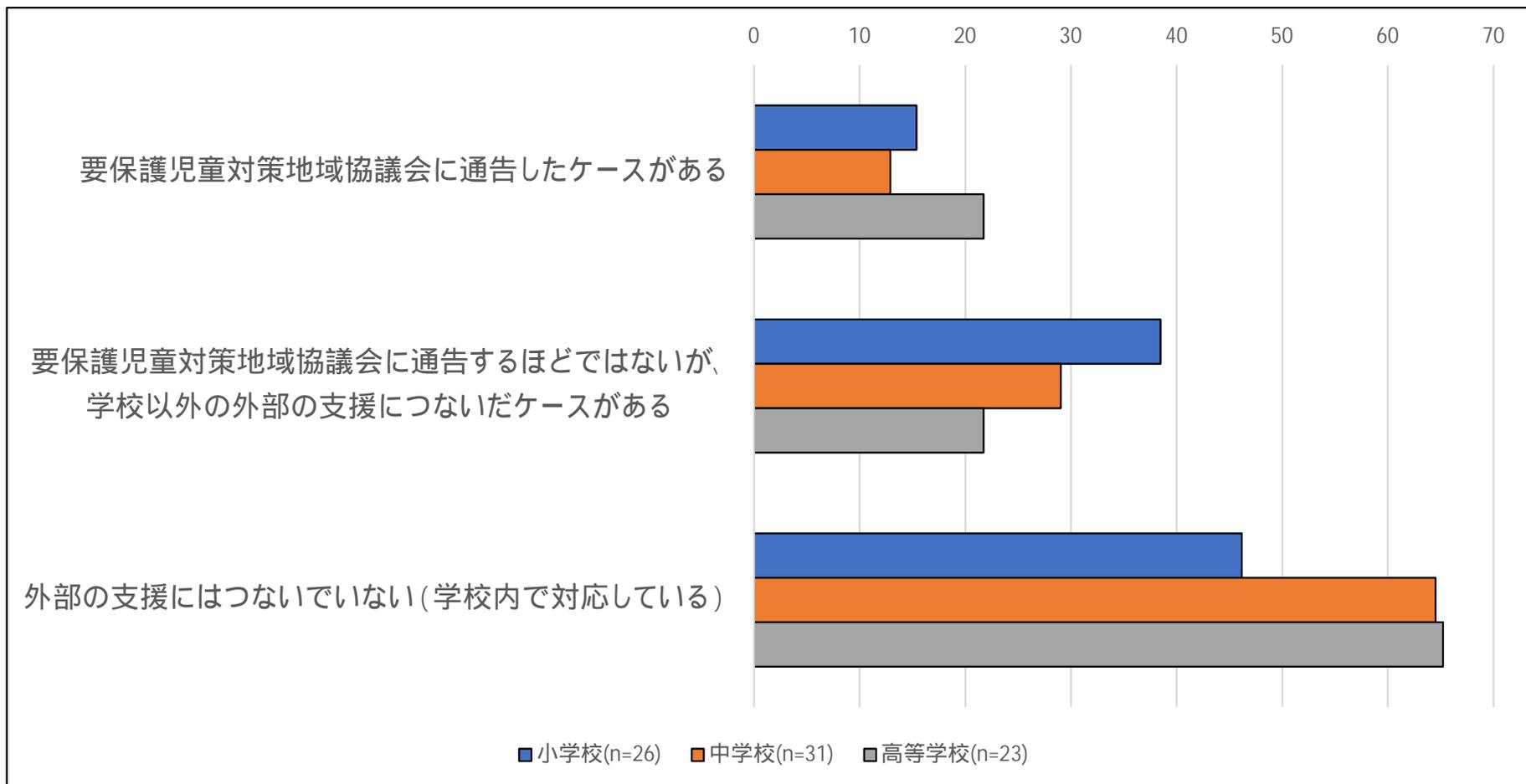
学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

外部の支援につないだケースの有無

ヤングケアラーが「いる」と回答した学校で、要保護児童対策地域協議会への通告のほか、何らかの外部の支援につないだケースの有無については、「外部の支援にはつないでいない(学校内で対応している)」が最も多かった。

外部の支援につないだケースの有無(複数回答)

(%)



学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

具体的な事例～外部の支援につないだケース～

学校以外の外部の支援につないだケースのうち、要保護児童対策地域協議会に通告した直近の事例についての概要は下記のとおり。

- 1 要对協に通告した直近のケースの概要

【回答があったケース数...小学校4件、中学校4件、高校5件】

ヤングケアラーの性別・学年

性別については、小・中・高合計で女性が10人、男性が3人となっている。

学年については、小学校では小学3～6年生、中学・高校では中学2年生～高校3年生の間で各数件の回答がみられた。

学校生活の状況(複数回答)

小学校では、「宿題や持ち物の忘れ物が多い」や「身だしなみが整っていない」という回答が多く、

中学・高校では、「学校を休みがちである」が最も多く、「遅刻や早退が多い」「校納金の納付が遅れる、未払い」が続いている。

お世話を必要としている人の続柄・状況(複数回答)

誰のお世話をしているかについては、小学校でも中学・高校でも「きょうだい」が最も多く、続いて「母親」となっており、その状況についても「幼い」が最も多く、「要介護」「精神疾患(疑い含む)」が続いている。

お世話の内容(複数回答)

全体として「家事」「きょうだいの世話や送り迎え」「見守り」が多くなっている。中学・高校では「身体的な介護」「感情面のサポート」という回答もみられた。

ヤングケアラーと気付いたきっかけ

欠席や遅刻などの学校生活の状況から面談や家庭訪問を行って把握したケースや、入学時から関係機関を通して情報共有がなされていたケースなどがみられた。

学校が行った支援等

「学校内で情報共有や見守りを行っている」といった回答が最も多かった。また、SCやSSWなどの専門職による面談を継続的に行っているケースや、市町の児童福祉部署と連携して対応しているとの回答もみられた。

支援した結果、子どもへの変化

変化は見られないとの回答も一定数あったものの、「特定の教員には悩みを話してくれるようになった」など児童とのコミュニケーションが以前に比べて取りやすくなったという回答や、医療機関の受診につながったといった回答もみられた。

学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

具体的な事例～外部の支援につないだケース～

学校以外の外部の支援につないだケースのうち、要保護児童対策地域協議会に通告するほどではないが、学校以外の外部の支援につないだ直近の事例についての概要は下記のとおり。

- 2 学校以外の外部の支援につないだ直近のケースの概要

【回答があったケース数...小学校10件、中学校9件、高校5件】

ヤングケアラーの性別・学年

性別については、小・中・高合計で女性が16人と、男性及びその他の合計8人の2倍となっている。

学年については、小学校では小学2～6年生の間で回答があり、うち小学6年生が最も多かった。中学・高校では中学1年生～中学3年生、高校2～3年生の間で回答があり、うち中学1年生が最も多かった。

学校生活の状況(複数回答)

小学校では、「学校を休みがちである」「宿題や持ち物の忘れ物が多い」「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」という回答が多く、中学校では「遅刻や早退が多い」、高校では「精神的な不安定さがある」がそれぞれ最も多かった。

お世話を必要としている人の続柄・状況(複数回答)

誰のお世話をしているかについては、小・中学校では「きょうだい」、高校では「母親」が最も多かった。その状況についても小・中学校では「幼い」が最も多く、高校では「精神疾患(疑い含む)」や「それ以外の病気」といった回答がみられた。

お世話の内容(複数回答)

小・中学校では「きょうだいの世話や送り迎え」が最も多く、次いで「家事」となっている。

高校では「家事」が最も多く、次いで「見守り」となっている。

ヤングケアラーと気付いたきっかけ

本人との普段の会話やSCとの面談などを通して、家事やきょうだいのお世話をしている状況を把握したというケースが多くみられた。また、アンケート調査や関係機関からの情報提供で把握したとの回答もあった。

つないだ機関

つなぎ先の機関としては、SCやSSW、市町の児童福祉部門、児童相談所との回答がみられた。

学校が行った支援等

SCやSSW、市町と連携した情報共有や見守りの体制を取っているといった回答が多かった。

支援した結果、子どもへの変化

変化は見られないとの回答もあったものの、児童・生徒の精神的な安定や落ち着きにつながったとの回答や、困りごとを相談しやすい関係を築きつつあるとの回答もあった。

学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

具体的な事例～学校内で対応しているケース～

外部の支援にはつながらず、学校内で対応しているケースについての概要は下記のとおり。

- 3 外部の支援につながらなかった直近のケースの概要

(1) 外部の支援につながらなかった理由

【回答数...小学校12件、中学・高校35件】

外部の支援につないでいない理由については、大きく分けて以下の3点が回答として多く挙げられた。

主な回答について、一部編集のうえ掲載

現段階では学校内で対応可能と判断したため

- 調査で回答があった後、担任や学年団で該当生徒と面談をしてもらった。頻度も高くなかったため、経過を観察している段階であり、外部の支援が必要であると判断しなかった。

学校生活への影響が特にみられないため

- 本人は、料理などの家事は嫌いではなく、また本人だけでなく、きょうだいと家事を分担することによって、家庭では宿題などの勉強ができており、部活動にもしっかり取り組んでいる。「子どもの権利」が守られていないということではないため。

本人にあまり困り感がみられないため

- 現在のところ、本人が大きな負担と感じていないため。また、保護者自身が、児童に負担をかけていることを認識し、極力負担を減らそうと努力している姿勢がみられるため。
- 本人との面談を行い、時間の融通が利かなくなる部分で不満に思うときもあるとのことだったが、家庭の中での自分の役割としての認識もあり、外部支援につないでいない。
- 友人との会話で、「世話が大変だ」と言っていたという情報を得て、幾度か本人に確認してみたが、本人から明確な困り感の訴えがなかったため。

(2) 学校内でどのように対応しているか

【回答数...小学校12件、中学・高校34件】

外部の支援につないでいないケースにどのように対応しているかについては、大きく分けて以下の3点が回答として多く挙げられた。

主な回答について、一部編集のうえ掲載

本人や保護者との面談

- アセスメントシートを用いた面談により状況を確認している。
- 担任および相談部主任との面談に加えて、スクールソーシャルワーカーとの面談を設定している。
- 担任と本人との継続的な面談や観察を通して、見守りを続けていくこととする。

アンケート調査等による経過観察

- 毎月児童に行っている生活アンケートの中に、ヤングケアラーについて確認するための項目を設けている。内容によって、担任が個別に面談等を行い状況の把握に努めている。
 - 連絡帳や定期的なアンケートへの記述内容を見ている。
- 学校内での情報共有・見守り
- 課題が未提出の時など、状況を聞いたりしている(負担にならない程度に)
 - 学校生活の折々に、複数の職員で当該生徒に声をかけるようにしている。職員間で情報交換をし、変化に気を付けるようにしている。
 - 学年職員で共有し観察を行っている。

学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

支援にあたって気を付けていることや難しいと感じること

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した学校に、支援にあたって気を付けていることや工夫していること、難しいと感じることについて尋ねたところ、以下のような意見がみられた。(主な意見について、原文掲載を基本としつつ一部編集のうえ掲載)

- 1 気を付けていることや工夫していること

【回答数:小学校23件、中学・高校50件】

児童や保護者との密なコミュニケーションによる状況把握

- 生徒とよく話し、信頼関係の構築と状況把握に努めている。
- 生徒同士の会話から情報収集をしたり、教育相談でそれとなく話題にしたり、普段から生徒との何気ない会話を行うようにしている。
- 担任や学年担当者からの積極的なコミュニケーションにより、本人の状況についての把握に努めている。
- 保護者や児童の話聞く機会を増やし、心のケアをするとともに、現状を把握するようにしている。

調査や面談による状況把握

- ヤングケアラーのアセスメントチェックリストを参考にして作成した本校独自のアンケートを年2回実施し、気になる生徒がいる場合は、保健相談部や担任からの聞き取りを行い、ヤングケアラーを把握することに努めている。
- 月1回の生活アンケートの中にヤングケアラーに関する質問を入れ、回答があれば確実に本人への聞き取りを行っている。

学校生活の観察による状況把握

- 提出物の遅れや、身なり、家庭学習の取組等から、家庭の状況をつかめるようにする。
- 遅刻、早退、欠席等が続いた時などは、個別に状況を聞いたりしている。
- 生徒との雑談やいろんな講話や学習のあとの生徒の感想などから今の状況を察知できるようアンテナを張っている。

関係機関との情報共有・収集

- 中学校、市教育委員会、市児童福祉部署等との情報共有を行っている。
- 様々な機関や地域からの情報を得ること。

その他の工夫や配慮

- 調査についてはWEBを利用し、周囲の生徒に気付かれることなく、気軽に回答ができるよう工夫している。
- 課題の提出などで、必要と思われる場合(きつそうな状況である時)は期限を延ばすなど配慮している。
- 生徒の訴えてきた話は、些細なことのように聞こえても記録を残すようにしている。また、関係職員で共有をするようにし、ヤングケアラーにあたるかどうかの判断を少人数の職員に偏らないようにしている。

学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

支援にあたって気を付けていることや難しいと感じること

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した学校に、支援にあたって気を付けていることや工夫していること、難しいと感じることについて尋ねたところ、以下のような意見がみられた。(主な意見について、原文掲載を基本としつつ一部編集のうえ掲載)

- 2 難しいと感じること

【回答数:小学校23件、中学・高校51件】

ヤングケアラーの判断の難しさ

- 家族間で助け合うことは通常のことであるため、ヤングケアラーが疑われる児童との会話で得られる情報から、ヤングケアラーかどうかを判断するのが難しい。
- 家の手伝いの範囲とそうでない場合の境界が不明瞭であり、どこで線を引くのが難しい。
- 小学校低学年の場合は、手伝いと区別が付きにくい。

状況把握の難しさ

- プライバシーに関するところが多く、あまり深く家庭の問題に踏み込めないこと。
- 家庭の状況を知られるのが嫌で、調査等に本当のことを記入していない生徒がいる可能性がある。
- 気になる生徒に担任や学年職員等が尋ねても、答えない(答えたくない)生徒もあり、対応を進めることが困難。
- ヤングケアラーと思われる児童の把握について、長期の様子から異変に気付くこととなり、早期発見が難しい。

支援につなげることの難しさ

- 学校として支援したいと思う(外部機関につなぐなど)が、保護者に困り感が見られないため、具体的な支援を行うことが難しい。生徒自身にも支援を提案するが、保護者に気を遣っているのか積極的に支援を受けようとする姿勢がない。
- 他人が介入することを望まない場合や本人が話したことを家族に知られることを嫌がるケースも多く、支援が難しいと感じる。
- 保護者が外部機関につながることを拒否することが多い。

本人に自覚がないことの難しさ

- 生徒はケアすることが当然だと思って、自分がヤングケアラーだと気づいていないことも多い。気づいていたとしても外部に助けを求めてもどうにもならないとあきらめていることもある。あえて普通に振る舞い、ヤングケアラーであることを隠そうとしていることがあると感じている。
- 該当生徒にとっては、他の家庭の状況を知るすべはなく、自身が置かれている状況を客観的に理解させることも難しいと感じている。

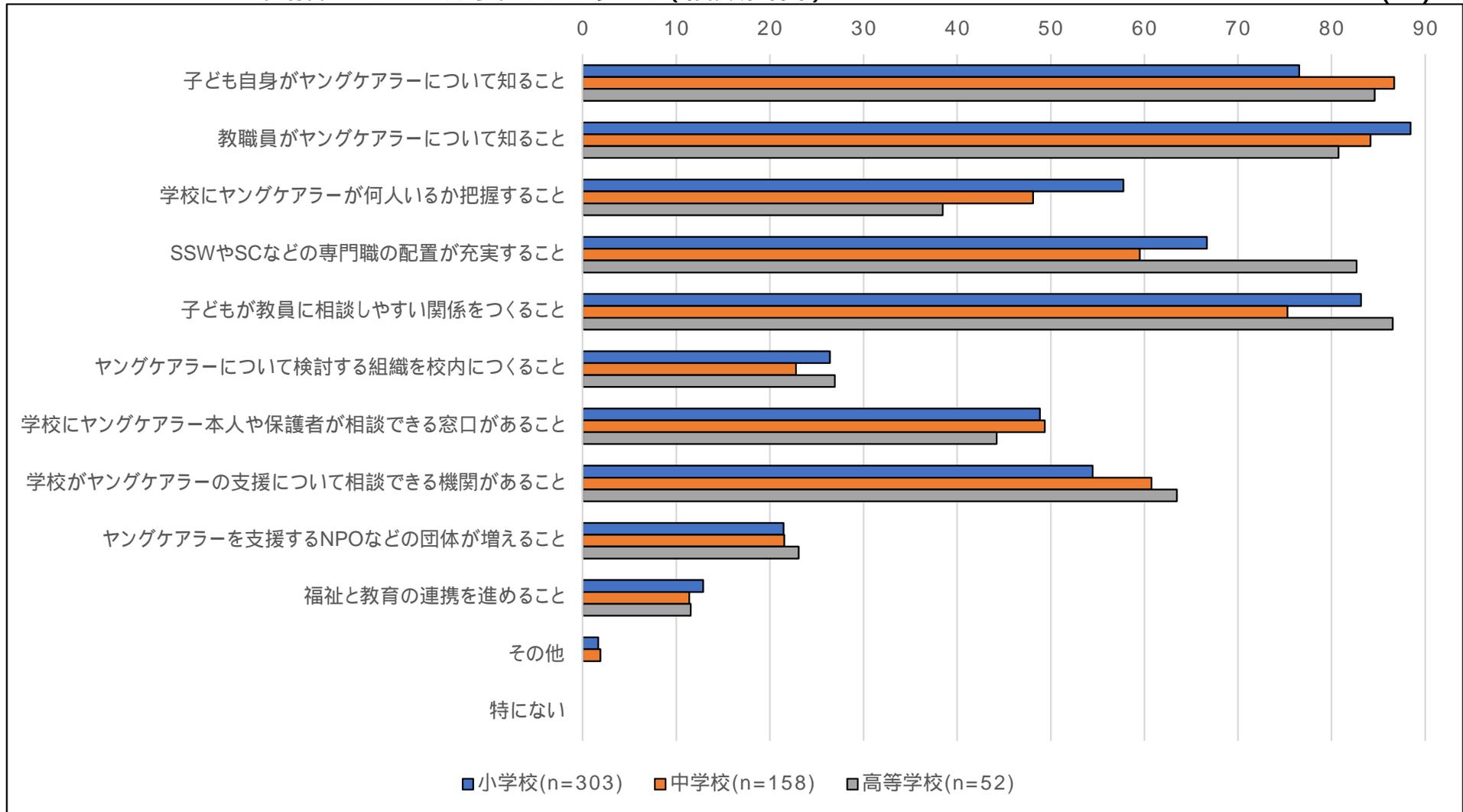
学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

ヤングケアラーの支援のために必要だと思うこと

ヤングケアラーの支援のために必要だと思うことについては、「子ども自身/教職員がヤングケアラーについて知ること」「子どもが教員に相談しやすい関係をつくること」が多かった。また、高校においては「SSWやSCなどの専門職の配置が充実すること」も多くなっている。

ヤングケアラーの支援のために必要だと思うこと(複数回答)

(%)



学校向けヤングケアラー実態調査の結果(全体版)

自由記述

ヤングケアラーに関する自由意見については、以下のような回答がみられた。
主な回答について、原文掲載を基本としつつ一部編集のうえ掲載。
【回答数:小学校126件、中学・高校90件】

ヤングケアラーに関する自由意見

普及や啓発に関する意見

- 自分がヤングケアラーだと認識していないケースも多く、表面化しにくい問題だと思うので、児童に向けて情報を発信していく取り組みが必要だと思う。
- ヤングケアラーというワードだけが、ふわふわと漂っている感じがしている。家族のケアはすべての家庭にある営みだが、問題視すべきはどのような状況なのかを多くの人々が認識する必要があると感じる。
- 保護者がこれまでに行ってきた懸命な子育てをすべて否定してしまうような啓発行動は危険だと思うので、保護者の養育・教育観を理解しながら、ヤングケアラーの定義についても和やかに情報提供をはかり、一緒に子どもを育てていく協力者という認識が必要であると思う。

早期発見や相談に関する意見

- もっと気軽に相談してきてほしいとは思っているものの、言葉だけ聞くとどうしても大きな問題と捉え身構えてしまいがちなので、その様子が児童にも伝わり相談しにくい環境ができてしまっているように感じる。ヤングケアラーについて相談できる機関や具体的な支援を行ってもらえる機関などを知ることができるとより活用しやすくなると思う。
- ヤングケアラーの調査は、「かわいそうな子(配慮のない親)探し」ではなく、その子とその家族をサポートできるよう、ともに何ができるか考えるサポーターにつなぐためにあるのだと、当事者にも一般の方々にも理解してもらって相談しやすい環境を作る必要があるだろうと感じている。

外部との連携など支援体制に関する意見

- 学校だけで対応することは難しいと感じる。外部機関との連携がもっと容易になるといいと思う。
- 学校ができることは限られているからこそ、SSW等を通じて外部の専門機関へつなぐことが重要。学校も生徒・保護者も相談しやすいSSWの増員と待遇改善を是非ともお願いしたい。

その他の意見

- ヤングケアラーに該当すると判断した場合でも、まずは当該児童・生徒の担っている役割を肯定的に捉えて、努力してきたことを認めてあげることも重要である。
- ヤングケアラーである子どもを支援することも大切であるが、ヤングケアラーになってしまう子どもたちが減るように、その保護者に対する支援をもっと充実させていけたらいいと思う。